



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コンテンツ・ツーリズムへの社会的アプローチ : 昭和の大衆文化というコンテンツ
Author(s)	妙木, 忍
Relation	コンテンツ・ツーリズム研究の射程 : 国際研究の可能性と課題 = The Scope of Contents Tourism Studies : Proceedings of the Symposium: "International Comparative Research on the Spreading and Reception of Culture through Contents Tourism", held at Hokkaido University(15-16 March 2015).
Citation	CATS 叢書, 8, 137-187
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61145
Rights	© 2016 妙木忍
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS8_7Myouki.pdf



コンテンツ・ツーリズムへの社会学的アプローチ 昭和の大衆文化というコンテンツ

妙木忍

北海道大学国際本部留学生センター特任助教

1. レトロスペース・坂会館とは

妙木忍と申します。本日は、「昭和の大衆文化というコンテンツ」というテーマでお話させていただきたいと思います。

今日は、スライドでご覧いただいている構成で発表を進めていきたいと思います。はじめに、昭和の記憶を留める展示空間について、札幌の「レトロスペース・坂会館」というプライベート・ミュージアムを事例として紹介します。それに対する視点として、昭和の大衆文化を通して生まれる交流がモノと人、人とスタッフ、そして来館者と来館者の間でどのように生まれているかを考察したいと思います。次に、現代に生きる私たちに記憶を残しつつ展示を続けている資料館である坂会館のあり方について考察し、今後の課題を述べたいと思います。

札幌出身の方はお召し上がりになったことがあるかもしれませんが、坂ビスケットをご存じでしょうか。有名なビスケット屋さんなのですが、実はその隣に「レトロスペース・坂会館」という資料館があります。スライドでご覧いただいているのは資料館を外から撮影したもので、写真の上のほうにマネキンが写っていますが、これには重要な意味がありますので覚えておいていただければと思います。続いてご覧いただいているように、手作りの入り口が設営されており、その脇の鏡には「ようこそレトロへ」と書かれています。また、扉に小さな文字で「ひな祭り展 三月十二日（木）迄」と書かれています。これは後ほど話題に登場します。

ご覧のように、館内には所狭しと昭和の品が置かれています。食器や写真、医療器具、またマッチ箱、煙草、さらにはガムの包み紙まであります。私がこの資料館を今回取り上げようと思った理由は、記憶の集積に関心を抱いたためです。もちろん、整然と並ぶ展示物についても気になってはいます。しかしそれ以上に、人々が展示品を寄贈・追加しモノが増えていき、それをまたその人が見に来ることもあるけれども、どれを誰が寄贈したのかは、記録を取ってあるとはいえ一般の来館者にはわからないという仕組みに興味を覚えました。

坂会館は記憶へのこだわりから、日常生活に関わるモノの収集・展示に基軸を置いています。たとえば、今朝私がコンビニエンスストアで購入したガムは、緑色の包み紙に包まれているのですが、このような私たちが普段触れているモノでも、30年経てば「30年前の人はこのようなガムを食べていたんだ」ということになると思います。逆説的ではあるのですが、このようなモノの収集・展示は館長の坂一敬さんが熱狂的なコレクターではない

ということによって可能となっています。また、この空間では展示されている品の盗難が起ることがあります。坂会館は監視しない・されない空間において、モノを集める・見せる、そして見るということをおこなっています。監視という言葉が強めですが、通常の博物館や美術館でしたら、もしかすると係の方がいらっしゃって、きちんとした体制のもとで見学することになるかもしれません。しかし、そうしたことをこの空間は望んでいないし、それを実施していません。その結果として盗難が起ります。その際に坂会館がどのように考えているのかについては後ほどお話しします。

では、この「レトロスペース・坂会館」とは、いったいどのような資料館なのでしょう。この資料館は札幌市西区にあり、2014 年に開館 20 周年を迎えました。オープン当初から入館料は無料を続けています。展示品は昭和 30 年代から 40 年代のものが多く、幅広くマッチ箱から医療器具まであります。来館者数のピークは 2011 年の 7,369 人で、最近是一道外のお客様が多くいらっしゃっています。このような状況から、昭和の大衆文化を集積した場所が観光の対象となっている 1 つの例として今日この資料館を取り上げることにしました。来館者数の変遷に関しては、中本尚子さんという女性(2015 年 3 月下旬より副館長)がスタッフの仕事に就かれたときから集計を始めており、スライドでご覧いただいているように推移しています。2011 年以降は少しずつ減っていますが、現在も 6,000 人近い来館者がいらっしゃいます。なぜ来館者が減ったのかという分析を中本さんがしておられますが、道内のお客様よりも道外の方が増えている可能性があるとのことでした。この写真に写っているのが館長さんと中本さんです。主な展示品は日常生活と密接に関わった品物で、その時代の人であればみんなが知っているような品物です。たとえば先ほどガムの紙をお見せしましたが、今の時代に生きている私たちはみんなこうしたガムが売られていることを知っていますし、また、たとえば北海道の方であれば、地方銀行でもらえるような袋であっても「あ、これは〇〇銀行の袋だな」とわかると思います。スライドの写真は東京に本社がある銀行の袋ですが、坂会館ではこのように銀行の袋までも集めています。あまりにも日常的なものなので、普通の人は集めず、ゴミ箱にばいと捨ててしまうかもしれませんが、集めようと思えばどこにでもあるため、日常の中でお金をかけなくても集められるというモノが多いです。しかしながら、非常に古い作品もあるので、職人技が感じられる品がたくさん出てきます。展示品を入れるケースも、手作りか再利用したもので、ここにもお金をかけていません。展示では似たようなものをそばに置きますが、そこには解説も名前も書かれていません。また、縦にいろいろな物を積み上げるような展示を行う時には、重さを分散させ、狭いスペースを有効活用しています。

この写真は館長さんが受付カウンターでいろいろな資料を見ているところです。私が 2 月におうかがいさせていただいた際に見せていただいたのはデパートで使っていたシールですが、実は私はこれまで見たことがありませんでした。館長さんによると昔は包装紙を今のようなセロテープでとめずに、たった 1 枚のデパートのラベルで上手にとめていたそうです。今のセロテープでは紙が破れて使えなくなってしまうそうですが、このラベルは水に

漬けておくときれいにはがれるため、昔は紙も大切にできたというお話が聞けるわけです。冊子をよく見てみますと、丸善や東京の鳩居堂など1つ1つのデパートのラベルを集めています。たとえばスライドでご覧いただいている写真には昭和34年に記されていますので、1959年のものだということがわかります。次の写真はガムの包み紙で、こちらは一升瓶のラベルです。これらの瓶はお酒を飲み終わった後に酒屋さんに返すのですが、酒屋さんに頼んで瓶を貸してもらい、捨てるはずのこの紙をきれいにはがして、それをいただくという形で収集されています。この写真はお酒の蓋ですが、チョコレートか何か、小分けされたお菓子の容器にぴったりはまるため、それを利用してご覧のように展示しています。

それでは、館長さんはなぜこのような展示を始められたのでしょうか。館長さんは1943年に北海道で生まれ、学生時代は東京で過ごし、40歳の頃に北海道に戻ってこられました。ちなみに館長さんのライフヒストリーは、都築響一さんが『珍日本超老伝』（2011年、筑摩書房）という本の中で紹介しており、参考になります。ここで、坂会館が開館するに至った重要なエピソードをお話します。1つ目は、坂さんが40代の時に、電車の中で優先席に座るように勧められたことです。2つ目は、雨の日に捨てられたマネキンを見かけたこと。これらがきっかけとなって、このレトロスペースを作ったそうですが、その部分を館長さんが昔応じられたインタビューから紹介したいと思います。

その雨の日に捨てられていたマネキンを見た時、自分と重なって見えたんです。つまりマネキンは用がなくなったから捨てられた……日本という国は、用がなくなれば人間も捨てます。それは「リストラ」っていう単語で呼ばれるにしろ、「お前は使い物にならん」って、それで終わりですから。だから、自分も歳をとったということを電車の件で知らされてゴミ捨て場を見た時、「……俺も捨てられる側に入ってるんだ」と思ったんですね。普段は拾わないですけど、その時はマネキンを家に持って帰りました。それがきっかけです。(Yellow page, 2003年6月号, No.264)

このような経緯からこの資料館が始まりました。先ほどお見せした写真で、2階にマネキンがたくさん並んでいたのは、その初心を忘れないという意味が込められているそうです。このように、かねてから館長さんはモノや人までも使い捨てにするという日本のあり方に疑問を感じていました。

一方で館長さんは、日本の高度な技術と技術者への視点や職人さんの心意気に深い理解を寄せています (Yellow page, 2003年6月号, No.264)。たとえば、ミシンに描かれた絵についても少しインタビューで触れているのですが、今の世の中ではなかなか余裕がなくなりスーパーの袋もだんだん薄くなり、安いものもたくさん売られて、できるだけ省略・簡略化していく中で、昔は技術者の心意気みたいなものが、作品に現れていたのだと話しておられます。

さらに、お金がかからないもので、かつ自分が何かを感じたものを収集し、庶民の家に

なかったようなもの, 高価なものは原則的に置きません (Yellow page, 2003 年 6 月号, No.264)。その根底には「皆がいなくなったものにも, 人を楽しませる力があると思ひまして」(HO, 2011 年 4 月号, Vol.41) という意識があります。

たとえばご覧の写真のようなランプは, 私もありこのようなものは見たことがなかったのですが, どういうときに使っていたのかと質問をすると教えてくれます。次は, 写真に関する機械です。フィルム以前の時代には写真乾板 (写真乳剤を無色透明のガラス板に塗ったもの) で写真を現像していたそうで, そのガラス板も展示されています。それから雑誌, タバコの自動販売機に並んでいたプラスチック製の見本の箱, 貝のネックレス, さらに下着まで展示されています。この写真がミシンで, 先ほどの話で出ましたように絵が入っていますが, このように昔の職人さんは, 遊びや楽しみを持たせて作品を作っていたということがポイントのようです。また, この『アナと雪の女王』の絵がついたティッシュは 2014 年に買ったものだそうですが, なぜこういうものを買っているかという, 今は手に入るけれども数ヶ月経つともう売られなくなるので, 売っているまさにその時に集めるのだと言っておられました。またこれは余談ですが, 数字にもこだわっておられまして, スライドの写真のように, 消費期限の欄に 1 が 5 つあるラベルなども集めています。また「二十周年おめでとうございます」という来館者からの贈り物なども届いています。

館長さんによると, 「ここはほっとするような場所であってほしい, また時間がゆっくり流れる場所であってほしいそうです。当館は無料なので来たい人は何度来てもいい。もし 100 円でも入館料をとれば, 2 回目 3 回目に行けなくなるので無料にしています」と。またここは, 時代のスピードについていけなくなった人のための場所であるとおっしゃっています。今では何でも難しい機械の操作が必要だったり, ゲームが発達したりして若者はそういうものに飛びつくけれども, それに追いつけない人もいるし, また追いつかなくてもいい, そういう人たちのために作った場所なのです, というお話でした。

それから展示を観る人に館長さんや中本さんから挨拶はしますが, 積極的には話しかけないそうです。しかし, 話しかけられれば館長さんや中本さんも話をするようです。来館者が見学してどのように感じるかは来館者の自由であって, こう感じてほしいとか, これを見てほしいとか, こうあるべきだということは一切考えていないそうです。見学の仕方も自由で, すぐに出ていってもいいし, ゆっくり見てもいいし, ソファで座ってもいい, そういう場所になっています。ご覧の写真は古いソファですが, こういったものがきちんと置かれています。次の写真は館長さんが古いテレビを見ているところです。この写真のような, 私も小さい時に見たことがあるような古いテレビと, その上にその次の時代のテレビが置かれ, さらにその上に現代の液晶の薄いテレビが置かれており, 3 つのテレビを比較しながら話をしているところです。

一方で, 館長さんがずっと昭和の大衆文化を残そうと思っているかといえば, 必ずしもそうではありません。その点を聞くと, 「なくならないモノはない」「モノはいつかはなくなるはずのものだ」とおっしゃいます。モノをずっと残すということはなかなか難しいと

いうことを館長さんご自身が痛切に感じていることがわかります。

また、モノを集めることに関しては、楽しく集められる範囲ならよいけれども、無理をしたり、苦労したり、楽しくないような集め方は良くないとおっしゃっています。さらに、モノを見るときに監視されると楽しくないとの考えから、盗難があっても監視カメラをつけないそうです。ただし、信頼関係に基づく見学を望んでいるのかというと、盗難はたくさんあるので、そこは「仕方がない」ともおっしゃっています。つまり、信頼関係に基づいて見ましようということではなくて、盗まれても仕方がないという考えです。これは、館長さんがご自身のことを熱狂的なコレクターではないとおっしゃっていることと実は関係が深いように思います。熱狂的なコレクターであれば、自分の家の中にコレクションを集めて、絶対に他の人たちには見せません。しかし、館長さんがここで見せているということから、監視したくないしされたくもないという気持ちに加え、盗難が起きてしまうことも仕方がないとした上で、自由にのびのびと見てもらうというおおらかな気持ちのもとで実現している資料館であるということがわかります。監視に関しては、現代社会はいろいろなところで管理されたり統制されたりして、なかなか居心地が悪く、こうした網の目の構造があるように私には思えますが、それに対するささやかな抵抗だと感じております。

たとえば、この写真のガラスケースには「このコーナーの素敵なライターは全て盗まれたので代用品を展示してます！」と書かれています。またこの棚には「ガラスを割って貴重なカメラが盗まれました！」と書かれています。本当に大変なことだったのですが、貴重なカメラがすべて盗まれてしまったそうなので、別の倉庫に置いてあったカメラを持ってきて展示をしています。

2. 坂会館におけるコミュニケーションの諸相

続いて、この資料館でいったいどのようなコミュニケーションが生まれているかという問いについて考えてみたいと思います。私が考えたのは、第 1 に、来館者と品物のコミュニケーションといえは言いすぎかもしれませんが、つまり来館者とモノの関係です。第 2 に、来館者とスタッフの間で起きるコミュニケーションがあります。第 3 に、来館者と来館者のコミュニケーションがあると思っています。特に第 3 の点はこの資料館の特徴でもあり、後ほどコンサートに関する話題などをお話したいと思います。

まず第 1 の点ですが、昭和の大衆文化の記憶やモノを通して、坂会館が来館者と記憶を結びつけている可能性は大いにありうると思います。それから来館者が坂会館にモノを運んでくることによる、モノの記憶化、そして記憶の集積ということも起きているだろうと考えます。第 2 の、スタッフとのコミュニケーションに関しては、自由でのびのびとした展示空間が来館者とスタッフを結び付けているという記録が残っているため、後ほどご紹介します。館長やスタッフに会いに来るという人までいます。記帳ノートの感想欄に見られる感謝の言葉、寄贈を行う来館者についてもご紹介したいと思います。

ここでいったん、館長さんを描いたハガキについてご紹介します。これは、画家の水戸麻記子さんが描かれたものですが、館長さんの周りに様々な展示物が浮かび上がるように描かれています。この画家の方は、この絵を描いてハガキにして、そして 100 円で坂会館で売られていますが、「そのすべての売上金を坂会館に寄付します」と言っています。つまり、ハガキを通して、来館者が坂会館に関わりを持っています。また、坂会館のシールや館長さんのプロマイドが売っています（会場笑）。そして書類をとめる木の洗濯ばさみや、自転車の鍵につけるようなキーホルダー、坂ビスケットのしおりなども売っています。

話題を戻しまして、第 3 の点に移りたいと思います。これが坂会館で重要な点なのですが、来館者と来館者のコミュニケーションとして、展示空間から生まれる交流の機会があります。たとえば新年会、ジンギスカンパーティー、忘年会、毎月開催されるミニ・コンサートがあります。実はそれぞれの会に来る方の層は少しずつ違い、新年会に来る人がみんなコンサートに来るかというところではなく、コンサートに来る人がみんな忘年会に来るかというところではないというように、少しずついらっしゃる方が違います。ご覧の写真は、私も参加した新年会で、若い女性もいらっやいます。お料理は近くのお店から取り寄せ、1 人 1,500 円を支払い、飲み物は自分で持っていきました。そして、次のスライドの写真では、館長さんが新年の挨拶をしています。ミニ・コンサートは昭和に特化したものです。2014 年のデータをここで示します。1 月は新年会があるため、2 月から 12 月までの第二木曜日に行われています。懐かしの昭和歌謡や、大月みやこの曲を聴く機会などが設けられています。曲を聞き始める前には、藤圭子の「圭子の夢は夜ひらく」が必ずかかり、終わりの曲は「惜別の歌」と決まっております、このようにしてコンサートが開かれています。この写真は今年 2 月のものですが、館長さんはじーっと聴いています。参加者も静かに聴いたり、口ずさんだり自由に楽しんでいます。再会を喜んでおしゃべりする人もいます。これは館長さんが 3 月のコンサートでの挨拶をしているところです。館長さんがニュースや海外の情勢などをお話されています。ご覧の写真は手作りの入れ物で、ビスケツトがたくさんあるため、それを紙の入れ物に入れ、参加者は自由に食べることができます。ちなみに参加費は 500 円です。この写真が参加費を入れるところで、この写真が前回の忘れもの、次の写真が前回の曲名と今回の曲名のリストです。続いてご覧いただいている写真は年賀状ですが、館長さんは年賀状を余分に 100 枚ほど買っているらしく、その理由は後ほどご説明します。ここに自分の名前と住所を書くと、次のコンサートの案内がこの年賀状に書かれて届きます。年賀状を余分に買っているのはなぜかというところ、当館では昭和 25 年以降のお年玉の記念シートをずっと集めており、毎年 100 枚年賀状を購入すればどれかは当選するということで集めているのです。残ったハガキはコンサートの招待用に利用しているということです。

またその他にも、毎月開催される企画展がありますが、それはコンサートとコンサートの間にあるため、コンサートの際には片づけなければなりません。ご覧のスライドで列挙した企画展の名称を見れば、どのようなものが当館にあるのかがお分かりいただけるかと

と思いますが、灰皿の展示会、空き缶だけの展覧会、資生堂に関する商品の展覧会、それから後で少し出てきますが、秘宝館に関する品物の展覧会などがありました。今年は医療器具、そして雛人形ですね。私も観に行きましたが、この写真のように時代が古い雛人形と新しい雛人形が展示されており、1つ1つについて、ここが違う、昔の職人さんはここに力を入れたんだよというような説明を次々にしてくれます。ところが先日のコンサートの時には、ここにコンサートのお客さんが座るために、雛人形は片づけられていました。

3. 記憶の重層化と解釈の場としての坂会館

それでは、考察に入っていきたいと思います。坂会館は「記憶を残しつつも新しい解釈をも生んでいるのではないか」と私は考えています。坂会館には記帳のための冊子があり、そこに感想が書かれています。来館者とスタッフのコミュニケーションの部分を抜粋しました。「お話を聞かせてもらってうれしかったです。また必ず来ます」(大阪府、女性)、「人との会話が生まれる場所である事が何よりもうれしかったです」(埼玉県、男性)、「館長さんの人情が何より最高でした」(神奈川県、男性と女性)、「一緒に写真をとってもらえてよかったです！」(北海道札幌市、女性)、「館長と中本さんとお会いできて嬉しかったです」(大阪府、女性)というように、ほとんどを道外の方からのメッセージが占めています。来館者はどこから来ているかという点、遠くは沖縄県、そして私の出身の高知県からも来ており、道内では函館や稚内からも来ているようです。スタッフの仕事というスライドに、来館者の対応と書いたのですが、これはとても重要な仕事になっていると思います。お客さんと一緒に写真を撮って郵便で送るということもしています。館長さんがデジカメをあまり好きではないため、フィルムの写真を撮って、それを焼き増して中本さんが送っているそうです。また中本さんは、他の美術館や博物館の学芸員の仕事とも似ている部分があるかもしれませんが、コレクションの整理、寄付の受付などもおこなっています。来館者情報については、何時何分ごろに何十代の方で男性が何名、女性が何名というのをすべて記録に残し、非常に緻密な統計をとっています。

毎週土曜日にはボランティアの方が来てくれて、「レトロスペース・坂会館」の開館や売店担当をしてくれます。バレンタインやホワイトデーにはその方たちに、感謝の気持ちで贈り物を贈っているそうです。土曜日の夕方には、品物に埃をつけないための布をかけるために、そのためのだけのボランティアの方も来てくれるそうです。

もう1つ注目したいのは、その品物が確かにその時代に存在したという証を、この会館が非常に大切にしているという部分です。下着の展示の写真をお見せしましたが、その説明をされていた時に、館長さんは「こういうものが確かにあったんだということを残しておくんだ」「あんなものなかったよと言われたいために」とおっしゃっていました。これが時代の証という意味です。続いてお見せしている写真は寄付ノートですが、坂会館には品物の寄付が来ます。大きすぎるもの、新しすぎるものは受付できないそうですが、「昭和」

に関するものが来たときには、ノートにきちんと記録して受け取られています。昭和の記憶を伴う遊興空間のパンフレットも寄贈されていますが、実はこれは非常に重要な資料だと思います。今は熱海にしかなくなりましたが、かつて存在した秘宝館のパンフレットが保存されていまして、日本で初めて開業した伊勢、その姉妹館の鳥羽、石和の資料もそろっています。10 年間秘宝館を調査してきた私でも絶対に入手ができない資料が寄贈され、ここに存在しています。

今日の発表の趣旨から逸れるので簡潔に説明しますが、秘宝館は 10 年前の 2005 年には 7 館ありました。たとえば伊勢、別府、北海道、熱海、鬼怒川、東北サファリパーク、佐賀県の嬉野にありましたが、去年の今頃つまり 2014 年 3 月には 3 館となり、今は 1 館になっています。それ以前に失われた秘宝館もたくさんあります。この写真は鳥羽の跡地です。続いての写真は石和の秘宝館の跡地で、今はドン・キホーテになっています。実は、伊勢と鳥羽と石和のパンフレットや入場券は、秘宝館の熱狂的なファンによって坂会館に寄贈されています。特に伊勢館は日本初の秘宝館として重要な存在で、医学模型まであったのですが、その配置図まで保存されています。当時は大量に印刷し配布していましたが、誰も集めようと思わなかったのが、かつて伊勢の秘宝館に関わった方も持っていないものです。スライドでご覧の写真は、鳥羽の SF 未来館のパンフレットものです。その一部は都築響一さんが買い取ってルクセンブルクで展示したり、横浜トリエンナーレで展示されたりしたこともありました。この写真は石和の秘宝館のパンフレットですが、ここももう閉館していました。現在、秘宝館文化を知るなら坂会館に行けばかなり重要な資料がそろっていて有益であると思います。

ここは北海道ですから、北海道の話も少し取り入れたいと思います。北海道秘宝館は 2009 年に閉館し、飾られていた象の模型は、香川県直島を新しいすみかとなりました。今は秘宝館の解体が行われていて、今週すべての施設が解体されます。私は先日、その象を見るために香川県に行ってきました。これが直島にある直島銭湯「I♥湯」です。ご覧いただいている写真は岡山県のフェリー乗り場で撮ったポスターの写真ですが、この象の模型は北海道秘宝館のものでした。これを私は女性用の風呂から見て、「ああ、香川県で再び会えた」と思ってとても嬉しかったのが先月のことです。続いての写真は北海道秘宝館の 3 日前のものですが、もう解体されて今週すべてなくなります。

ここで話を戻します。「レトロスペース・坂会館」という場合は、幾重にもその昭和の記憶を残しつつ、それを重層化したり、新しく解釈したりしうる場として機能しているのではないかと思います。見たことがないマシンや見たことがない写真の現像の機械などを見て、昔はこういうものが日常的に使われていたのだということを知ることもあります。また、昭和のモノだけではなく、たとえば遊興空間の記憶、誰かの写真や記憶の中にしかないような場所のパンフレットや入場券までも収蔵しています。昭和の品を知らない若い来館者もそれを知り、昔の時代を現代から遡って体験している可能性があります。さらに、山村高淑先生のレジュメに「世代間の断絶」という論点がありました。現在の私たちと過去の

歴史がどのように結び付くことができるのかという問いがそこでは提示されていましたが、その論点にもつながっていくかと思います。

坂会館に所蔵されているのは、モノ、そこに存在して使われていたモノです。だからこそ移動ができ、1ヶ所に集められています。これは非常に珍しい場所です。もはやここで見られないモノがあり、これは非常に逆説的ですが、日常生活で私たちが関わっている（いた）モノはここで見られません。今回は展示する側からの話に特化してしまいましたが、なぜ人は記憶を体現するモノを見るために旅をするのか、失われたものへのまなざしはどのように共有されていくのだろうかという問いを、今考えているところです。

4. 坂会館の空間としての特性と今後の研究の課題

続いて、坂会館が追求していることをまとめてみたいと思います。坂会館では、監視する・される空間をあえて回避し、そうしたことが行われている社会へのささやかな抵抗を試みているといえます。また、職人の方への高度な技術に対する非常に強い思いがあると受け取りました。さらに、館長さんの言葉に「一生懸命頑張ってきたが時代の流れでなかなか評価されなかった人たちへの思いも詰まっている」というものがあります。ここでは、見ることへの強制から解き放たれているといえるとも思います。お客さんが見ても見なくてもいいし、話しても話さなくてもいいし、何を感じても、あるいは感じなくても自由です。「これが盗まれました」という張り紙はありますが、解説も一切書きません。これはミニ・コンサートの時も同じで、音楽を聴いてもいいし、口ずさんでも、ぼーっとしていてもいい、そうした空間を作っているわけです。また、移り変わる時代に追いつこうとする傾向への疑問・抵抗のようなものがあり、自分のペースで歩みたい人への視線・配慮というものがこのコンセプトになっているように思われます。それから、規範や流行からの解放が可能な場所として、居心地の良さを感じる人が若い人の中にもいます。

最後に課題をお話しします。過去と現在を橋渡しする場として、来館者が昭和の大衆文化に魅力を感じる理由をもう少し調べてみたいと思っています。また、人々がモノや記憶を求めてそこを訪れるのはなぜなのか。そしてこのようなプライベートな施設が現代において果たす機能はどのようなものなのか。さらに、昭和の大衆文化の展示空間が異なる世代を結び付けるときに、人と人、人とモノの間にどんな相互作用が生まれるのか。国際的な文脈ではこれをどう考えたらいいのか。これらについては、まだ答えが出せていません。

補足になりますが、今回の発表の中で職人の技術について言及し、今日の山村先生のお話の中でコンテンツをつくった人々への言及がありましたので、もう1つだけ事例を紹介させていただきます。

今日、職人だけでなく一般の人のものづくりも注目されており、2015年3月現在、高知県立美術館にて「高知県立桃源郷 新・高知の造形文化展」が開催されています。これはそのパンフレットですが、裏には「利害や名声にとらわれず、シンプルに創造へ挑もうと

する人間のたくましさ」をお伝えしたいと書かれています。ここではモノの展示だけではなく、作った人の写真の展示までしています。私が行くと、学芸員さんが「これはおじいちゃんがお孫さんのためにつくったロボットですよ」などと説明してくれました。続いて、この写真はプロが作ったのかもしれませんが、台湾の製作者が作った蠟人形で、かつて龍馬の歴史館に収蔵されていたものです。桂浜の龍馬像はとても背が高いのですが、ここではその目線まで上がったような感覚になる高さの階段を作っていて、階段を上って龍馬の視線で見渡すという仕掛けまでつくられています。それでは、コンテンツ・ツーリズムの文脈で考えるとどのような発見があるのかなと考えながら写真を紹介します。私は 2 月にここに行ってきましたが、スライドでお見せしているのが高知県立桃源郷の展示です。パネルには写真の男性がこの船を作ったと解説が書かれてあり、作った方も写っています。おそらく家の中で作っているのでしょう、写真の手前が出来上がった船の実物です。次の写真は家の模型で、見る人は顔を近づけないと見えないくらい精密につくられており、奥に作った方の写真も展示されています。次の写真は奥が龍馬の像で、手前がサンゴで作られたライオンです。この写真はまた別の坂本龍馬像です。こちらの写真は先ほどご紹介した階段を上がり、桂浜の龍馬の視点から撮影したものです。以上のような展示空間になっています。

今日はモノと来館者、モノを作った人の技術への思いというものを 1 つのテーマとして、昭和の大衆文化としてお話をしました。ありがとうございました。

<<質疑応答>>

石川美澄

貴重なご発表ありがとうございました。私は坂会館に行ったことはありませんが、妙木さんの発表をお聞きして、なぜ館長さんが白衣をずっと着ているのかが気になりました。「場所の主」というお考えがあつて、そうしたことを意識されて、ああいった恰好をされているのかな、などと考えながらお話を聞いていました。

職人という言葉が出てきましたが、館長さん自身も職人氣質で非常に強いポリシーをもっておられると感じました。そうした部分に敬意をもって共感する人たちが、さまざまな品を寄贈しているのではないのでしょうか。たとえば山村先生のお話にも出ましたが、滋賀県の豊郷では、アニメに描かれた学校の校舎にファンの方が作品にちなんでギターを寄贈しています。長野県大町市のある旅館には、その地域が舞台となったアニメのファンの方々がフィギュアなどを寄贈して、それを見にファンの方が訪れるという現象が見られます。これらと今回のお話は、何か共通するものがあるのではないかなと思いました。アニメなりガムの包み紙というモノが、その場所や施設、あるいはその人と関わるためのコミュニケーションのきっかけになっているように見えます。

続いてのコメントですが、私はゲストハウスなど非常に小さな宿での人の交流に興味をもっています。今回の発表では、地域や場所に特化し、そことコンテンツ・ツーリズムという視点で発表・議論がなされていたと思います。しかし、そこにいる人を目的に旅に出るという場合には、観光資源は人であるということになります。人との交流は日常生活でもできるはずなのに、なぜ旅に出てまでその場所で人と交流をするのか。今回のご発表は、こうした私自身の興味関心と結びつくものがありました。

また、坂会館がパブリックでもなくプライベートでもない半公共的な空間であり、そこに館長さんのような人がいるということが、道外からの訪問者をも惹きつけるポイントであるかと思いました。今後さらに研究が進展することを楽しみにしています。

白井冬彦

私にコメントが回ってきたのは、昭和の大衆文化という発表なので、昭和や大衆文化にどっぷりはまっている者が選ばれたということだろうと思います。ただ個人的には酒場放浪記の世界の昭和が好きで、私の大衆文化は飲み文化のほうに行きすぎていますが。あまりモノにはこだわらないのですが、せっかくなのでコメントをいたします。

私が気になったのは、来館者の方はどういう年代の人が来られ、男女比はどうなっているのかということです。毎月のイベントに来られるようなコアな人と、たまたま来られる人で若干違うのかもしれませんが、こうしたプロフィールがもし分かれば教えていただきたいです。特に最後にお話しになったように、来館者はなぜ来るのか、何を楽しみに来るのかという点がわかれば、ご研究にも示唆的ではないでしょうか。

続いてコメントさせていただきます。確かにもう平成26年で、「昭和も遠くなりけり」という時代なんだと、お話を伺っていて非常に面白かったです。雑駁なコメントで申し訳ありません。

昨日からの各先生の研究発表を思い出しつつ聞いていた中では、特に今日は大衆文化という言葉が気になっています。大衆文化とは何なのか。一般的にはハイ・ソサエティな人たちではない、一般のあるいはマスの人たちの楽しむ文化であり、ハイ・カルチャーとは違うのだと思います。加えて、私が大衆文化の大事な要素であるのではないかと考えているのが、いわゆるいかがわしさや猥雑さみたいなものです。これと関連して、同じく昨日からずっと気になっているのが、19世紀のヨーロッパで起こったジャポニズムの動きです。特にフランス絵画に起こった浮世絵のブームは有名です。ツーリズムと結びつきづらいかかもしれませんが、文化の伝播という文脈では非常に大きなインパクトがあった現象です。最近のアニメなどで起こっているこのような現象を、どのように捉えればよいのかと思っているなかで、1つこれは面白い切り口かと考えているのは、大衆文化の中にある「お上が好ましいと思っていない」という要素です。猥雑でいかがわしく、ハイ・カルチャーとしてお上が奨励したいものではないものがしぶとく生き残り、批判もありながら生き残ってきたわけで、そのような文化の生命力があるのかと思います。現在残念ながら1つしか

い秘宝館はその最たるものではないでしょうか。以上のような大衆文化への切り口もあるかと思います。

最後になりますが、確か毎日新聞だったと記憶していますが、1 ヶ月ほど前に、熱海秘宝館の記事が掲載されていました。それは、最後に残った秘宝館の来館者が増えているという内容で、若い人、特に女性が多く訪れているということで、非常に関心を持ちました。この点についてもし情報がありましたら教えていただきたいです。

妙木忍

ありがとうございます。それでは頂いたご質問についてお答えします。来館者のプロフィールについては、1 年間の来館者数はたとえば 2014 年は約 6,000 人なのですが、プロフィールの分析はまだ行なえていません。ただ、私が 2 月と 3 月に参加したミニ・コンサートに訪れる、コアなメンバーのプロフィールは多少はわかります。20 代～30 代くらいの女性が 2 名、現役の新聞記者、退職された研究者、退職された警察官、また音楽に関することをされている方がいらっしゃいました。コアなメンバーはおおむね固定されており、男性がほとんどです。年代は 60 代、70 代、80 代の方が多いです。今、私が把握しているのは以上のとおりです。

熱海の秘宝館で女性が多くなっているということですが、当館は明るく解放感が展示のコンセプトで、実はそれは 1980 年 6 月のオープンの当初から目指されていたことでもありました。女性客を意識し、女性が来ても羞恥心を抱くことなく笑いながら出てこられるような展示を目指したという証言も残っているので、まさに 1980 年に開業させた人たちが考えていたことが今にも継承・再現されているのではないかと思います。

白井冬彦

先ほどのスライドに、「整然と並ぶ展示物＝分類の否定？」と書かれていたと思います。おそらくこれは意味のあることだと思いますが、補足していただけますか。

妙木忍

ありがとうございます。ここは時間の関係でお話しできなかった部分でした。この念頭にあるのは、京都大学学術出版会から昨年出版されたフェティシズム研究・第 2 巻のなかに収録されている、人類学者の田中雅一先生による「性を蒐集・展示する」という論文です(田中雅一編, 2014, 『フェティシズム研究 第 2 巻 越境するモノ』京都大学学術出版会)。その中で、愛媛県宇和島市の多賀神社にある性文化財資料館の話が出てきます。そこは坂会館のようにモノが大量にあり、それらは整然と並べられています。整然と並ぶモノに圧倒された来館者の証言を田中先生が引用しています。田中先生はその点を、整然と並んでいるにもかかわらず、分類を否定した場所なのではないかと論文の中に書いておられます。坂会館にもこうした力があるように思います。整然と並び、似ている品は近くにあるけれ

ども、博物館のような分類や名付けはしておらず圧倒される感じがあり、もしかしてあれは分類の否定なのではないか。そしてそれがお客さんを惹きつけているのではないかと思っています。

西山徳明

どうもありがとうございます。先ほど臼井さんから、お上が好まないものが生き残る、文化の生命力というお話がありました。張さん、クール・オーセンティケーションとホット・オーセンティケーションという概念との関連で何かご説明いただけませんか。

張慶在

オーセンティケーションとは、対象にオーセンティシティがあるというよりも、どの主体がどのような根拠でオーセンティシティを与えるのかというプロセスを指す概念で、3年ほど前に Eric Cohen らによって提起されました。そこにはクールとホットという2つの区分があり、クールはいわゆる権威に基づいたオーセンティシティ、ホットの根拠は感情とすることができます。

今日の妙木先生の発表で思ったのは、この会館はどちらかというと感情に基づくものであり、しかも集団的な感情というよりは、個人の感情に基づいたコレクションが博物館になったところが特徴だと思います。問題は、来館者が記憶のどの部分を共有して見に来るのかだと思います。妙木先生はどのようにお考えでしょうか。

妙木忍

ありがとうございます。私もその点を考えていますが、もしかするとあるモノを見たくて行っている方もいるかもしれませんが、どちらかというと昭和の品に囲まれて館長さんや中本さんと何かを話すということに意味が生まれているのかもしれない。また、昔のモノを見ながら説明を受ける人もいるでしょうし、私も先ほど話題に出したデパートの包装紙をとめるシールについてお話をうかがったのですが、このように自分の知らないものを知りたいという要素もあるかもしれません。もう少し調べてみようと思います。

安斎レオ

昭和の大衆文化ということで、一言だけお話をさせていただきます。昔グリコの食玩で「タイムスリップ・グリコ」という、ありきたりのテレビやミシンを商品化したものが大ブレイクしました。昭和という時代は、懐かしいというよりも、自分がその時間を共有した記憶を皆が持っているものだと思います。たとえば子どもの時に楽しかったということや、親と一緒に遊んだこと、私はガンダムのコレクターなのですが、当時の夏休みにプラモデルを作った記憶が鮮明にあります。そして、今はもうないメーカーのプラモデルを探すと高額で取引されています。というのは、子どもは保存しようと思わないので、すでに消費

されてしまっているからです。かつて 30 円や 50 円で売られていたプラモデルが，今ものすごく高額で取引されています。昭和の記憶を現在みんな探し求めている，それに対してのペイをどんどん払ってもいいと思っているというような状態なのだろうと思いました。

黒見敏丈

1 つ質問があります。これは山村先生にもお聞きしたいのですが，昨日のコンテンツ・ツーリズムの定義の中で，コンテンツ，メディア，コミュニケーションという 3 つの要素で説明されていたと思います。しかし，今回の発表にあった坂会館の事例を聞いてみると，メディアというものが見えてきませんでした。もしメディアを考慮に入れない場合は，すべての観光がコンテンツ・ツーリズムという話になってきてしまうように思えます。ただ今の発表と昨日の定義とのつながりを教えていただけませんか。

山村高淑

ありがとうございます。私自身も，これからご指摘いただいた点を議論していかなければいけないと思っています。まず，「すべてがコンテンツ・ツーリズムになってしまう」という議論も，我々の研究チームの中で既になされてきました。つまり，観光の空間自体がメディアのため，あらゆるものがコンテンツ・ツーリズムとして考えられないだろうかという極端な仮説も一方ではあります。ただ今回の妙木先生のご発表に関しては，記憶や経験・体験というものを 1 つのコンテンツとして捉えられるのではないかと思います。すなわち，記憶は場所やモノに託さないと消えていくものなのではないか，ということです。記憶の再生装置と言ってよいと思いますが，そういうものを探し求めている人たちが坂会館に行って，あるモノというメディアを媒介としながら，そうしたコンテンツを呼び起こしたり共有したりするという形で，つながっていくのだと考えられないでしょうか。記憶というものを再生・再認識する際には，何かきっかけとなるモノが重要で，さらに坂会館にいる同じ場を共有した人たちによってコミュニケーションがとられていくというところに要点があるような気がしています。このように考えると，極端に言えば歴史遺産のようなものも過去の記憶が付与された 1 つのメディアとして捉えることもできるのではないだろうか。こうした意味で，昨日問題提起を行いましたように，ヘリテージからポップカルチャーまでという一連の流れを考えることができるのではないかと検討しておりますが，これはまだあくまでも個人的な考えです。

妙木忍

その時代を知っているという人たちの思いなどが，今回の事例の中では意味をもつてくるとは思いますが。その意味で，コンテンツ・ツーリズムとして考えた時に，もう少し議論すべき点が残っているように思うので，さらに考えていきたいと思っています。

西山徳明

どうもありがとうございました。黒見さんからのお話も山村さんからのご説明も、言われるとなるほどと思う反面、一般的にコンテンツというのはモノであるという捉え方と齟齬をきたす点と、またそこまで拡大し始めると、逆に何でも言えてしまうのではないかという点が疑問として残るようにも思います。これに関しては後ほど改めて議論をしたいと思います。妙木さん、ありがとうございました。

文献

無署名

- 2003 「30 年以上前の記憶を封印する……『レトロスペース坂会館』という空間」野村満（発行人）『Yellow page』264: 25-29。

無署名

- 2011 「捨てればゴミ、飾ればエンターテイメント 不用品たちの第二ステージ」（レトロスペース・坂会館）大鹿寛編『HO』, 41: pp.36-37。

田中雅一

- 2014 「第 12 章 性を蒐集・展示する」田中雅一編『フェティシズム研究 第 2 巻 越境するモノ』, pp. 395-416, 京都：京都大学学術出版会。

都築響一

- 2011 『珍日本超老伝』東京：筑摩書房。

第3回CATS観光創造研究会

コンテンツ・ツーリズムへの社会的アプローチ ～昭和の大衆文化というコンテンツ～

北海道大学国際本部留学生センター・妙木忍

(2015年3月16日、北海道大学学術交流会館)

本日の構成

- 1 はじめに:
昭和の記憶を留める展示空間を考える
- 2 分析の対象:「レトロスペース・坂会館」という
プライベート・ミュージアム
- 3 分析の方法:昭和の大衆文化を通して生まれる
交流に着目
- 4 考察:記憶を残しつつ新しい解釈を生む装置
- 5 今後の課題:過去と現在を橋渡しする場







「記憶の継承装置」としての資料館？

- ・整然と並ぶ展示物—分類の否定？あるいは
- ・記憶の集積（人々が展示品を寄贈・追加していく参加型の仕組みがある）
- ・記憶へのこだわり—日常的な収集に基軸を置いた収集と展示（日常生活に関わるもの）
- ・熱狂的なコレクターではないことによって可能となる展示空間（盗難の話、後述）
- ・モノを集める・モノを見せる・モノを見るということ—監視しない／されない空間にて

レトロスペース坂会館

- ・北海道札幌市西区二十四軒
- ・1994年にオープン（2014年に20周年を迎えた）
- ・入場料は無料
- ・昭和30年代・40年代の品が多い
- ・ジャンルは幅広い（マッチ箱から医療器具まで）
- ・来館者数のピークは2011年（7,369人）
- ・最近では道外客も多く見られる。
- ・昭和の大衆文化を集積した場所が、観光の対象となっている。

来館者数の変遷

1997年	661名	2006年	3,750名
1998年	1,093名	2007年	3,685名
1999年	1,600名	2008年	4,880名
2000年	2,001名	2009年	5,223名
2001年	2,231名	2010年	6,904名
2002年	3,090名	2011年	7,369名
2003年	3,630名	2012年	6,150名
2004年	3,785名	2013年	6,000名
2005年	4,031名	2014年	5,845名



どのような品があるのか？

- ・日常生活と密接にかかわった品物
- ・その時代の人であれば、みなが知っている品物
- ・みなが使ったことのある品物
 - あまりにも日常のもので普通は集めない？
 - 一方、集めようと思えば日常の中で集められる
 - 職人技が感じられる品も多い
- ・入れるケースも手作りまたは再利用
- ・展示は似たようなものをそばに置く
- ・縦に展示スペースをとるときには、重さを分散







なぜこの展示が始まったのか

・館長の坂一敬さん

1943年、上士別（現在の士別）生まれ

40歳のころに東京から北海道に戻る

都築響一、2011、『珍日本超老伝』ちくま文庫にライフヒストリーがある

優先席を勧められたことと雨の日に見かけた

捨てられたマネキン（→2階のマネキンと関連）

→ものや人を使い捨てにする日本のあり方

→日本の高度な技術と技術者への視点「職

人さんの心意気」（ミシンに描かれた絵の話）

インタビューより（Yellow page, 2003年6月号、No.264）

どのような物を集めたか

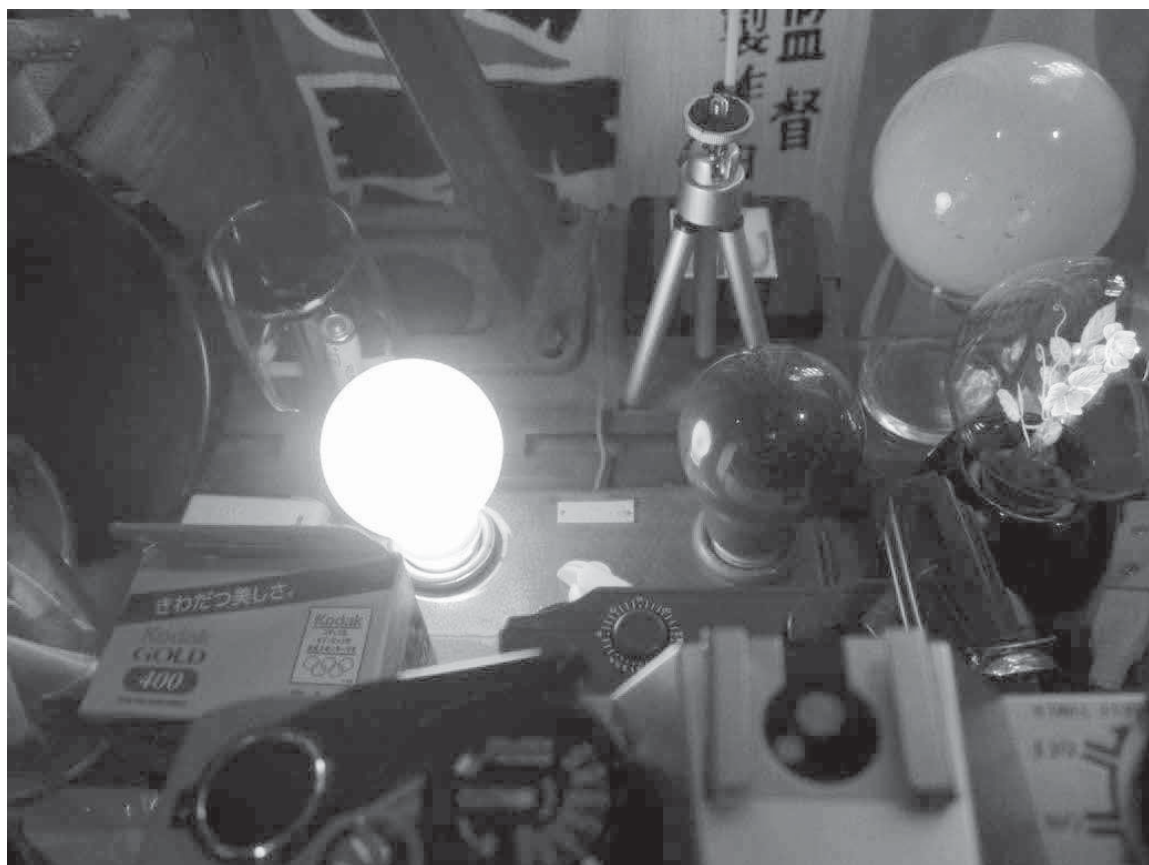
「集めるのにお金がそれほどかかる物ではなくて、自分が何か感じた物」

「庶民の家になかったような高い物は、原則的に置かない」

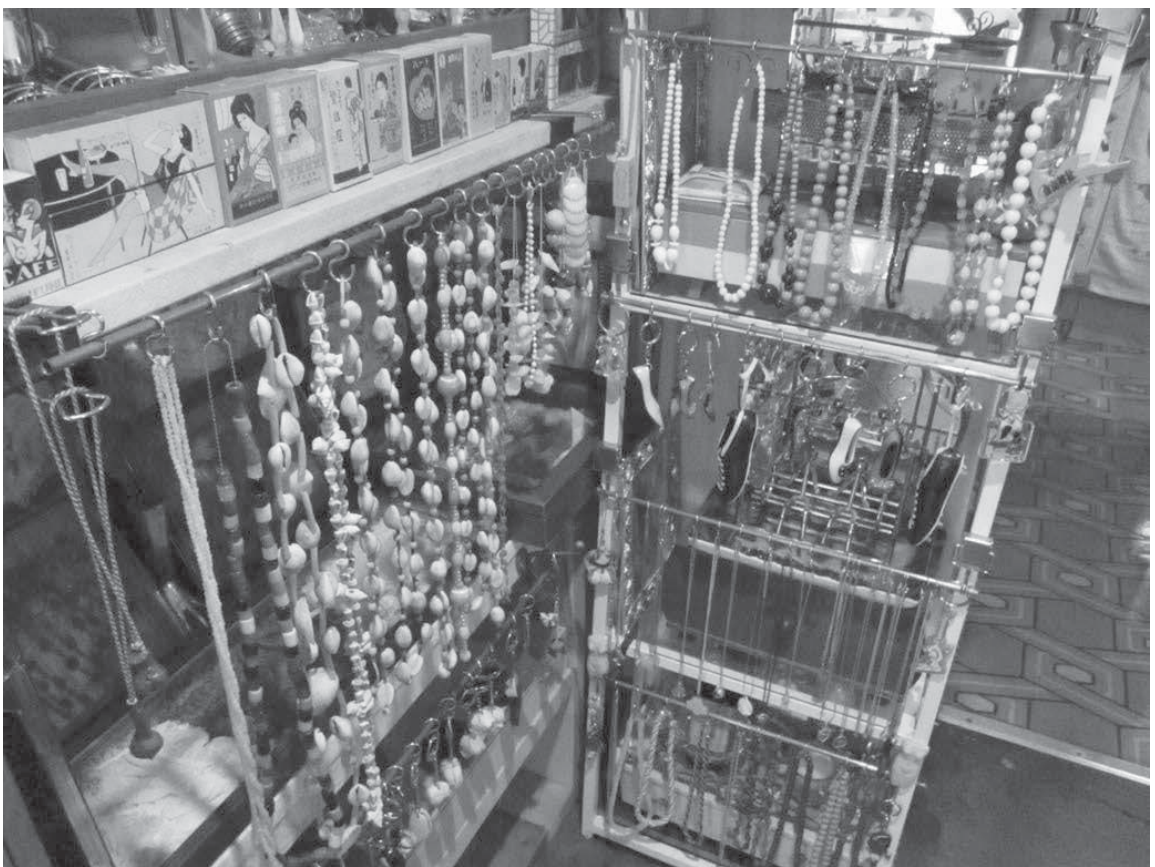
インタビューより（Yellow page, 2003年6月号、No.264）

「皆がいなくなったものにも、人を楽しませる力があると思ひまして」

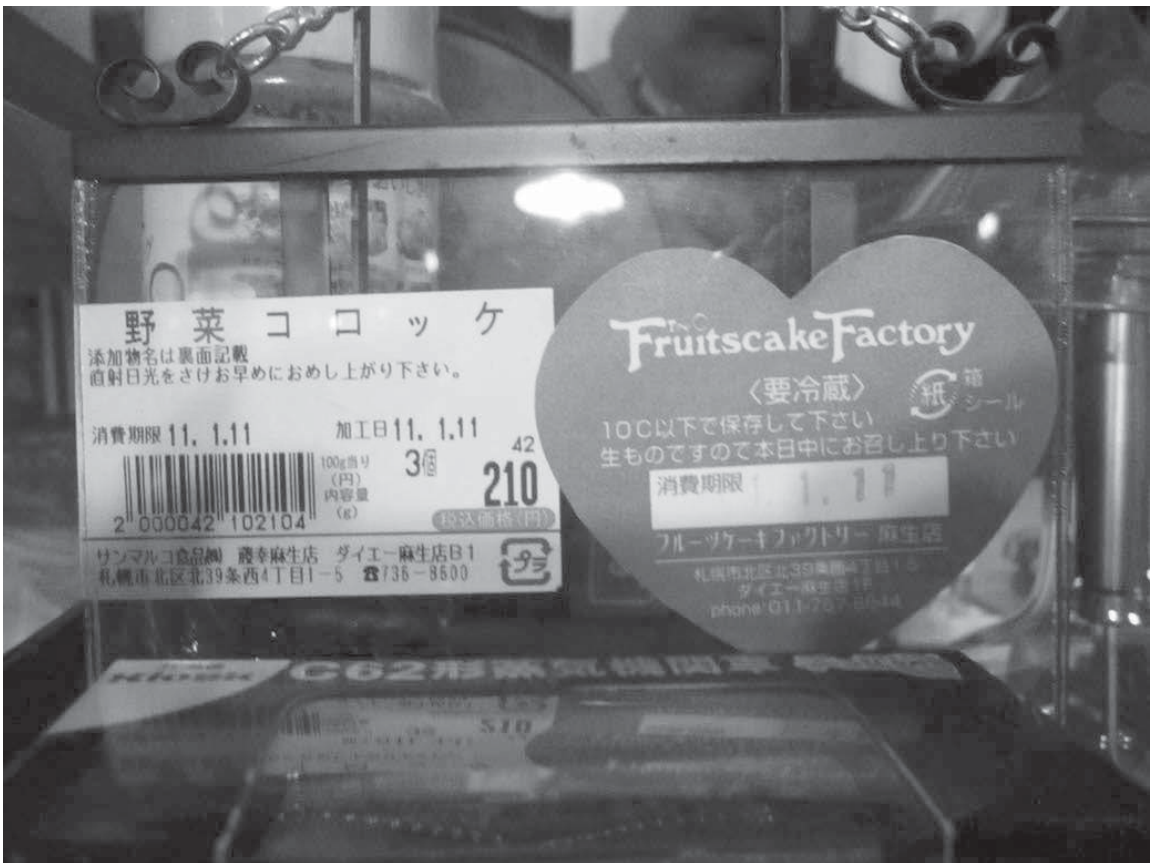
インタビューより（HO, 2011年4月号、Vol.41）













館長によると・・・

- ・ほっとするような場所
- ・時間がゆっくり流れる場所
- ・無料なので来たい人は何度でも来やすい
- ・時代のスピードについていけなくなった人のための場所(時代のスピードに合わせる必要もない)
- ・館長やスタッフからは適度に話しかける。
- ・話しかけられれば話をする。ソファもある。
- ・来館者が見学してどのように感じるかは来館者の自由であり、こう感じてほしいなどとは思っていない。見学の仕方も自由。



館長の言葉より

- ・なくならないものはない。ものはいつかはなくなる。
- ・ものを集めるのは楽しく集められる範囲なら良いが、楽しくなくなったらよくない。
- ・ものを見るときに監視されて見たら楽しくない。だから、来館者が見学するときには監視したくない。
 - 信頼関係に基づく見学か
 - 管理・統制された社会への抵抗といえるかも
 - 盗難についての見解は「仕方がない」
 - 「熱狂的なコレクターでない」ことについて補足





昭和の大衆文化が集まる場所で生まれる交流

- (1) 来館者とモノのコミュニケーション
- (2) 来館者とスタッフのコミュニケーション
- (3) 来館者と来館者のコミュニケーション

- ・昭和の大衆文化の記憶やモノを通して坂会館が、来館者と(モノに付随する)記憶を結びつけている可能性
- ・来館者が坂会館にモノを運んでくることによるモノの記憶化・その記憶の集積

昭和の大衆文化が集まる場所で生まれる交流

- (1)来館者とモノのコミュニケーション
- (2)来館者とスタッフのコミュニケーション
- (3)来館者と来館者のコミュニケーション

- ・展示空間が来館者とスタッフを結びつけていること(→館長やスタッフに会いにくる人の存在。記帳の感想欄に見られる感謝の言葉。後述)
- ・寄贈をする来館者(後述)
- ・はがきをめぐる話(オリジナルグッズも)

昭和の大衆文化が集まる場所で生まれる交流

- (1)来館者とモノのコミュニケーション
- (2)来館者とスタッフのコミュニケーション
- (3)来館者と来館者のコミュニケーション

- ・展示空間から生まれた交流の機会
新年会、ジンギスカンパーティー、忘年会
2月から12月に毎月開催されるミニコンサート



新年会2015年1月15日、21名

ミニコンサート2014年 18時から 500円

- 2月13日(木)懐かしの昭和歌謡その1 9名
- 3月13日(木)懐かしの昭和歌謡その2 15名
- 4月10日(木)懐かしの昭和歌謡その3 17名
- 5月15日(木)懐かしの昭和歌謡その4 13名
- 6月12日(木)懐かしの昭和歌謡その5 11名
- 7月10日(木)懐かしの昭和歌謡その6 12名
- 8月21日(木)霧島昇の世界 13名
- 9月11日(木)フランク永井の世界 13名
- 10月9日(木)大月みやこの世界 14名
- 11月13日(木)大川栄策の世界その1 16名
- 12月11日(木)大川栄策の世界その2 15名

ミニコンサート2015年 18時から 500円

2月12日(木)大川栄策の世界その3 16名

3月12日(木)鶴田浩二の世界 23名

参考)始まりの歌と終わりの歌



ミニコンサート2015年2月12日





その他の催し: 毎月開催される企画展

2011年

博多人形、ひな人形、アイヌ人形、五月人形、だるま、下駄、オルゴール、ぬいぐるみ、キューピー・手作り動物、クリスマス

2012年

灰皿、ひな人形、貯金箱、五月人形、かばん、靴、8ミリカメラ・ポラロイド、戦争、紙コップ(武井コレクション)、空缶、コカ・コーラ、クリスマス

2013年

動物の置物、ひな人形、こけし、五月人形、男こけし、いづめ人形、ガラスケースこけし、企業物ガラスコップ、戦争～風立ちぬ～、クリスマス

2014年

ミニボトル、ひな人形、日本人形、五月人形、かわいい人形、秘宝館、ビールジョッキ、戦争、資生堂、ノリタケ、ニッカ、クリスマス

2015年

医療器具、ひな人形





来館者とスタッフのコミュニケーションの具体例 来館者による記帳の感想欄(2014年)より

「お話を聞かせてもらってうれしかったです。また必ず来ます」(大阪府、女性)

「人との会話が生まれる場所である事が何よりもうれしかった」(埼玉県、男性)

「館長さんの人情が何より最高でした」

(神奈川、男性と女性)

「一緒に写真をとってもらえてよかったです！」

(北海道札幌市、女性)

「館長と中本さんとお会いできて嬉しかったです」

(大阪府、女性)

来館者とスタッフのコミュニケーションの具体例 来館者による記帳の感想欄(2014年)

・73名記帳

・道外は、千葉県、東京都、高知県、熊本県、埼玉県、大阪府、広島県、栃木県、兵庫県、神奈川県、愛知県、沖縄県、京都府、山口県、鳥取県、長野県、奈良県など

・道内は札幌市のほか、

苫小牧市、旭川市、北広島市、恵庭市、岩見沢市、留萌市、稚内市、函館市など

スタッフの仕事

- ・10時～11時：準備＝布を外す、お茶をわかす、（以前は）洗濯、そうじ（今は別の担当者がいる）

- ・11時：自動ドア、シャッターを開ける。電気をつける。

オープンしている間

- ・会計、はがきの宛名書き、プログラムのコピー、来館者の対応、買い物、電話、ファクス、寄附の受付（ノートへの記載）、来館者情報の記載（時間、年代、性別）、コレクションの整理（何年も手つかずのものがある。宝くじの外れ券のコレクションなどもある）、売っているものの品出し、管理、バレンタインやホワイトデーの贈り物の準備（ボランティアの方にプレゼント）、「何から何まで」とのこと

- ・18時30分：シャッターを閉める。自動ドアの電源を切る。布をかける。～19時

- ・土曜日はボランティアの方、布を夕方かける方が来られる。

自分の大切なものを寄贈する人々の存在

- ・「寄附ノート」への記入

- ・昭和の記憶をともしなう遊興空間のパンフレットなどの寄贈（一例：秘宝館）

2005年調査時に残っていた秘宝館（開館順）

元祖国際秘宝館伊勢館（三重県度会郡玉城町）

1972年開館 2007年閉館

別府秘宝館（民族資料館）（大分県別府市鉄輪）

1976年開館 2011年閉館

北海道秘宝館（北海道札幌市南区定山溪温泉）

1980年開館 2009年閉館

熱海秘宝館（静岡県熱海市八幡山）

1980年開館

鬼怒川秘宝殿（栃木県藤原郡藤原町、現日光市）

1981年開館 2014年12月31日閉館

東北サファリパーク秘宝館（福島県二本松市塩沢温泉）

1982年開館 2006年閉館

嬉野武雄観光秘宝館（佐賀県藤津郡塩田町、現嬉野市）

1983年開館 2014年3月31日閉館

昭和の記憶をともなう遊興空間 のパンフレットや入場券の寄贈

元祖国際秘宝館

伊勢館、鳥羽館、石和館のパンフレットや入場券
→訪問者によってレトロスペース・坂会館に寄贈
されている。

特に伊勢館は日本初の秘宝館として重要。その
姉妹館である鳥羽館と石和館の資料があること
も奇跡的。配られていた当時のもので、失われや
すい資料。調査時には、伊勢でも入手できず。



「レトロスペース・坂会館」という場

- ・幾重にも昭和の記憶を残す・重層化する・新しく解釈しうる場として機能か。
- ・昭和のモノだけでなく、昭和の遊興空間の記憶(パンフレットなどとして)までも収蔵。
- ・昭和の品を知らない来館者もそれを知り、昔の時代を現代からさかのぼって体験している？
- ・山村先生のレジュメで「世代間の断絶」という論点があった。「現在の私たちと、過去の歴史は、どのように結びつくことができるのか？」という問いが提示されていた。

「レトロスペース・坂会館」という場

- ・モノであるがゆえに、移動が可能であり、一ヶ所に集められた珍しい場所。
- ・もはやここでしか見られないものがある。
- ・なぜ人々は記憶(を体現するモノ)を見るために旅をするのか？
- ・失われたものへのまなざしの共有化？

坂会館が追求しているもの

- ・監視する／される空間の回避→管理・統制を徹底する現代社会への警鐘とも受け取れる
- ・技術職人への思い(と「一生懸命頑張ってきた多くの人たち」への思い)
- ・見ることへの強制からの解放(見るのも見ないのも、話すのも話さないのも、何を感じても、来館者の自由に任せている。解説なども書かない。ミニコンサートのときも同様に、音楽を自由に楽しむ空間)
- ・移り変わる時代に追いつこうとのみする傾向への疑問と自分のペースで歩む人々への視線
- ・規範や流行からの解放(規範や流行に自分をしばってしまうことからの解放)が可能な場所

残された課題

- ・来館者が昭和の大衆文化に魅力を感じる理由
- ・人々がモノや記憶を求めるのはなぜか
- ・このようなプライベート・ミュージアムが現代果たす機能（博物館や美術館とはまったく別の）
- ・昭和の大衆文化の展示空間が、異なる世代を結びつけるとき、生まれている相互作用は？
- ・国際的な文脈での検討なども必要

最後に

職人の技術の話が出てきたので、いま開催されている高知県立美術館の高知の造形文化展を紹介したい。ここにち、一般の人のモノ造りも注目されている。

そこでは、モノの展示だけではなく、それを造った人の写真の展示もあり、その人がなぜそれを造ったのかを来館者に考えさせてくれる。また、そのほかにも、プロが造ったのかもしれないが、龍馬の蠟人形や大きな像が展示されており、桂浜の龍馬像とほぼ同じ高さにまで上って写真を撮影するという体験のしかけも組み込まれている。

コンテンツ・ツーリズムの文脈で考えてみると、どのような発見があるだろうか。

